

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 ここに居ることに 無限の意味を見いだす

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第39回から第41回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第39回は『浄土論』の「不^ふ虚^こ作^さ住^じ持^じ功^く徳^{とく}」について、第40回は「一^{いち}念^{ねん}多^た念^{ねん}文^{ぶん}意^い」と不^ふ虚^こ作^さ住^じ持^じ功^く徳^{とく}について、第41回は「菩^ぼ薩^{さつ}功^く徳^{とく}」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第39回の問題提起から、その一部を紹介する。（越部良一）

■ 本願力回向

不^ふ虚^こ作^さ住^じ持^じ功^く徳^{とく}の文言は、「観^{かん}仏^{ぶつ}本^{ほん}願^{がん}力^{りき} 遇^ぐ無^む空^{くう}過^か者^{しゃ} 能^{のう}令^{りやう}速^{そく}満^{まん}足^{ぞく} 功^く徳^{とく}大^{だい}宝^{ほう}海^{かい}」（『真宗聖典』137頁、東本願寺出版部）、「仏の本願力を観ずるに、遇^むうて空^{くう}しく過^かぐる者^{しゃ}なし」、そして「能^{のう}く速^{そく}やかに功^く徳^{とく}の大^{だい}宝^{ほう}海^{かい}を満^{まん}足^{ぞく}せしむ」と。「本願力」という言葉は、『浄土論』中ではこの部分と、あとは偈文についての注釈の最後のほうに「本願力回向」と、その2回だけ出てくる言葉です。最初の「観」という言葉を、親鸞聖人は、「遇」の字とあわせてご覧になっていて、単に心で何かを見て観察していくという人間の努力ではなくて、本願力に遇^むうことだと。本願力に出遇^むうというのは、一般の浄土教の関心からすれば、あの世に往^いたら出遇^むえるのだと、こういうふうに見えるのでしょうけれど、それを、「本願力回向」という言葉から、親鸞という人は見直した。

如来の、どこまでもたすけずんば止まん、と

はたらく願いが回向なのだ。如来の大悲は、われわれが知るも知らざるも、いつもわれわれにはたらき、われわれに呼びかけている。この回向のはたらきに、われわれが値^ち遇^ぐする。このことと「遇^む無^む空^{くう}過^か者^{しゃ}」と言われる「遇」とは、別なことではない。まあ、自力で言うなら、浄土に往^いって菩薩になって、それから出遇^むうと、そういう話になるのでしょうか。けれど、『浄土論』をよくよく読んでみると、大悲が衆生にはたらきかけるということを語ろうとする論であると。愚かな身のところに、いま出遇^むえるのだと。それは、凡夫からは往^いくことはできなくても、大悲からは来ているのだということを実感できる、そういう教えです。

この本願力回向を抜いたら、親鸞聖人という人の言葉は、大事な中心を抜いた家みたいなものです。本願力回向が、親鸞という人の思想を建てているわけです。それをはっきりといただかないと、それに出遇^むわないと、親鸞聖人がおっしゃる、凡夫で生きていて、本当にそこにそのまま救いがあるという、そういう道が開けて来ないのではないかと思います。

■ 大事な、大事な莊嚴功德

私たちは、目の前にあるさまざまなかことで悩み、目の前にあることが、何とかなればたすかるのではないかと考えている。けれども、本当は、目の前にある問題は、有限の問題とはいえ、ほとんど解決しない問題ばかりです。まして、われわれは、自分の思うままにならないさまざまなか条件を与えられて生きて、もがいている。自分の思うままになる条件なら、たすかる

と思うけれど、本当はそうではない。思うままになるということはないし、もし、思うままになる世界があったとしても、人間は墮落するだけである。つまり、歩まなくなる。

宗教的なものに触れてみると、人間はたすかるということはないのです。常に、何か深い悩みを、深い矛盾を孕んで生きているものなのです。「ああなったらいいだろう」「こうなったらいいだろう」と言うけれど、どうなってもだめなのです。だから、お釈迦さまは「生老病死」と。生きているということが矛盾であり、そこに病氣等がある、思うままにならない。だから、生きていることは苦悩なのです。それでは、死んだらいいか。安田理深先生は、死んで解決すると思うのは、本当の解決ではないのだと、繰り返しおっしゃっていました。一時停止みたいなものだと。逃げただけのことである。この苦悩の根源を本当の意味で見定めて、そこから立ち上がり直すことができる道が、仏陀が教えてくださる道である。これに出遇うまでは、われわれは歩むしかない。

われわれは、いつも何か時がまた瞬かえりく間に過ぎていってしまっていて、無駄に過ごしたと思う。どれだけ充実していると思っても、願かえりみると、何か速いと言いますか、何をしていたのかなという感じですね。一向に満ち足りないで、瞬かえりく間に時が過ぎて人生を終わってしまう。だから、何とか満たそうとして、いろいろやるけれども、それでも何となく過ぎたなど。そういうのが人生の悲しみだろうと思うのです。

そういうものに対して、“空しく過ぐる者はない”という信を与えるのが、本願力なのだ。これに出遇えば、無駄なものは一つもない、そういう実感が与えられる。つまり、苦悩が無くなってたすかるのではなくて、苦悩も悲しみも、すべてが意味をもってよみがえ甦かえりってくる。こういう人生が開けるのが救いだというのが、親鸞聖人が生きた道であり、われら凡夫に教えてくださる道だと思うのです。

私たちは、苦悩が無くなって、立派な人間になってたすかるのだと思うから、いろいろな善

を積もうとするけれど、どれだけ愚かであろうと、どれだけ無駄なことばかりやっていると、実は一つも無駄ではないという眼が開き直されてみたら、ここに居ることの意味がまったく変わるわけです。どこかに往かなければたすからないのではなくて、ここに居ることに無限の意味がある。そういう眼が与えられてくるなら、どこかに逃避してたすかるという発想ではなくなるわけです。そういうふうひるがえに翻かえりって、ここに居ることをいただける眼が与えられる。それが“回向に値遇する”ということなのだろうと思うのです。

本願力に出遇うなら、「しらず、もとめざるに、功德だいぼうの大宝、そのみにみちみつ」（『一念多念文意』同544頁）と、親鸞聖人はおっしゃる。われわれには見えない。求めてもいない。大体、知らない。けれども、本願力に出遇えば、そういうふうひるがえに身が拝めますよ、と言うわけです。拝めるような心で見直してみると、わが身だけでない、一切の衆生の身が、尊い身として拝めるようになる。大悲が願っているところが、少しく感じられるようになる。大転換の眼が与えられるのが、回向の事実である。だから、回向という一点を忘れたら、親鸞聖人を見る眼は無くなるわけです。どれだけ親鸞聖人が、この不虛作住持功德の言葉を喜ばれたか。これは大事な、大事な莊嚴功德だろうと思います。（文責：親鸞仏教センター）



「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2005年12月20日（火）午後6時30分～9時

2006年1月17日（火）同上

2月10日（金）同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分